

コラム 34 :【境界線②】

幼児期、思春期、青年期によって「親子間の距離」は異なります。思春期に入って心配だけ「こんな風に言うてはいけない」「勝手に子どものスマホを見てはいけない」と我慢して見守ることもあれば、「取り返しのつかないことになる前に、全てを知っておかなくては…」と黙って部屋を調べたり、何が何でも言うことを聞かせてしまったりすることもあります。

状況によるので、どちらがよいとは言えませんが、子どもとの境界線を無断で越えることが続くと、子ども側は対話する気力が失せてしまいます。

「親子間の距離」は、家庭の中では「他人行儀」を念頭において考えるとよいかもしれません。例えば「私はこうしたいのですが、あなたはどうですか？」と尋ねることで、無断で境界線を越えるのを防ぐことができます。

就活をせず、さぼっているようにしか見えない子どもに「～までに決めなかったら、家を出ていくこと」などの策が取られがちですが、このような一方的な方法は有効ではありません。

待つ期限を決めたら、期限をこえた場合はどうするのか話し合ってください。その際、こちらの意図を説明することが大事です。立場の悪い状態にいる子どもは、親の言動全てに裏がないか心配して、「仕送りを止められるのではないか」「追い出されてしまうかもしれない」「一生口をきいてくれないかもしれない」と思い詰めてしまうことが多いです。職場で交渉するように、あるいは外交交渉のように、他人行儀にお話ししてみてもいいでしょうか。